

オンライン患者教育プログラムを活用した看護学生への学習効果

松本 光寛* 船橋 悦子** 高橋 さつき* 岡 美智代*

*群馬大学大学院保健学研究科 **医療専門学校水戸メディカルカレッジ

Learning Effectiveness for Nursing Students Using an Online Patient Education Program

Mitsuhiro Matsumoto* Etsuko Funabashi** Satsuki Takahashi* Michiyo Oka*

* Gunma University, Graduate School of Health Sciences ** Mito Medical College

＜和文抄録＞

目的：本研究の目的は、看護学生に患者教育プログラムをオンラインで学習してもらい、学習後に「患者教育に関する知識」「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」の効果指標を用いて学習成果を検証することである。学習に用いた患者教育プログラムは、Encourage Autonomous Self-Enrichment (EASE: イーズ) プログラム[®]であり、患者の行動変容への効果が検証されている患者教育方法である。**方法：**研究デザインは単群の前後比較研究である。対象者はA専門学校看護学科の2年生。オンライン学習開始前、学習終了1ヶ月後の2時点で調査した。効果指標としては、学生が研究成果に基づいた患者教育プログラムを学ぶことで、根拠のある1) 患者教育に関する知識が向上し、プログラムを通して研究成果を学ぶことは、2) 研究成果活用への認識が高まり、知識や根拠の認識が高まることで3) 将来的な仕事に向ける意欲にも影響するのではないかという仮説を立てた。**結果：**対象者は35名(女性32名)で、平均年齢は20.8歳であった。3つの効果指標全てにおいて、オンライン学習後に有意に向上した。**結論：**オンラインで患者教育プログラムについて学習できるEASEプログラム[®]は、学習後に看護学生の「患者教育に関する知識」「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」という3つの指標を有意に向上させることが示された。

＜ Abstract ＞

Objective: This study aimed to have nursing students study a patient education program online and examine the learning outcomes using effectiveness measures of “knowledge about patient education,” “awareness about using research findings,” and “motivation toward future work. This study used the Encourage Autonomous Self-Enrichment (EASE) Program[®], a patient education method verified to be effective in changing patient behavior. **Methods:** Pretest-post-test Control Group Design. Second-year students of the professional training college of nursing participated. The study was conducted at two time points: before the online program and one month after. As an indicator of effectiveness, we hypothesized that students’ learning based on research results would 1) improve their evidence-based knowledge of patient education and that learning research results through the program would 2) increase their awareness about using research results, and by doing so, 3) influence their motivation for future work. **Results:** A total of 35 participants (32 women), with a mean age of 20.8 years, showed significant improvement in all three efficacy measures after online learning. **Conclusions:** The EASE Program[®], which allows students to learn about patient education programs online, significantly improved nursing students’ knowledge of patient education, their awareness of using research findings, and motivation for future work.

キーワード

患者教育

patient education

情報通信技術

information and communication technology

看護基礎教育

basic nursing education

研究成果活用

utilization of research results

仕事意欲

work motivation

I. 諸言

慢性疾患の増悪予防や健康維持にむけて、患者の自己管理の重要性が認められており、その支援の一つに看護師が行う患者教育がある。患者が自己管理を継続するには、患者自身が自己管理の重要性を理解し、患者個々の生活に合った自己管理方法を選択する必要があるが、患者が自己管理の必要性を理解していなければ、合併症や再入院のリスクが高まる¹⁾。そのため患者教育は医療専門職者にとっての重要な課題²⁾でもあり、看護師の支援的役割は大きく、看護師は専門職者として患者教育を提供する知識を学習することが求められている。

しかし、看護師は患者教育について「患者に適切な教育を提供する自信がない」³⁾「個性に沿った効果的な支援を行う事の困難感」⁴⁾を感じており、看護学生（以下、学生）も患者教育をどのように進めて良いのか方法もわからず、「患者への知識提供のみに傾倒しやすい」⁵⁾「単に情報を提供しているだけのように感じる」⁶⁾ことが報告されている。このことから、解決には看護基礎教育における知識提供方法の見直しが必要⁷⁾である。さらに、2019年から2023年に基礎教育を受けた学生は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、緊急事態宣言が発令⁸⁾されるなど、対面の講義・演習や臨地実習が中止となった。オンラインにおける学習は確立されておらず、学生は患者教育を学ぶ機会を失うこともあった。そのため、患者教育の知識不足が問題といえる。

また、看護基礎教育では、社会のニーズに応じた指定規則改正が行われており、令和4年（2022年）に、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正した第5次省令が適応されている。厚生労働省が発表した看護基礎教育検討報告書では、地域医療構想の実現に向け、人口及び疾病構造の変化に応

じた医療体制の整備が必要であることや、看護職員の就業場所は、医療機関に限らず在宅や施設等へ広がっており、多様性・複雑性に対応した看護を想像する能力が求められている⁹⁾。患者教育においても同様で、対象の疾病だけでなく、多様な生活スタイルや背景を理解し、対象に合った看護を提供する必要がある。このことから看護基礎教育から学生が患者教育の知識を学ぶことは、重要な課題であると言えよう。しかし、筆者らの経験では、学生が患者教育を学ぶ機会は少なく、また、看護学生が患者教育方法をオンラインで学ぶことの効果を検証した先行研究も見られない。

そこで、これらの解決方法として、学生が患者教育方法を自宅等からオンラインで学習できるシステムの導入が有効であると考えた。筆者らは、既にオンラインで、患者教育プログラムである「EASE（イーズ）プログラム[®] ver.3: Encourage Autonomous Self-Enrichment Program[®]（以下、EASE）」¹⁰⁾を学生や医療者が学習できるシステムを運用している。EASEとは日本語では、「自主的な自己涵養促進プログラム」であり、医療者がEASEを用い患者教育を進めることで、患者の自己健康管理を促進することができる。EASEにはプログラムを進めるためのアクションプランがあり、Step 1からStep 6に構成化されている。EASEは対象者にとって大切なことである生活重要事を前景化させたうえで、保健行動モデルなどを活用しながら対象者理解とアセスメントを行う。行動や認知の修正に関する基本的原理と方法論は、認知行動療法を活用して構成されているものである。

EASEを用いた先行研究では、患者の行動変容支援に対して88.6%の変化¹¹⁾を認め、無作為ランダム化比較試験では介入群のセルフマネジメント行動

が向上¹²⁾し、EASEはセルフマネジメント行動に効果があることが示されている。また、看護師へEASEを学ぶ研修を実施し、研修を受講した看護師の「患者教育に関する知識」「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」の効果を測定した先行研究では、全てにおいて有意に高まったことが示されている¹³⁾。この研究で示された3つの効果は、厚生労働省⁹⁾の「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」と比較すると、「健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復に関わる実践能力」は「患者教育に関する知識」と合致し、「根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力」は「研究成果活用への認識」と合致し、「専門職者として研鑽し続ける基本能力」は「将来的な仕事に向ける意欲」と関連すると思われる。そのため、筆者らが開発したオンライン学習を活用することで、厚生労働省が求める到達目標が効果的に学べると考えた。

以上のことから、本研究では、患者教育プログラムをオンラインで学ぶ方法を学生に用いることとした。学生は患者教育プログラムをオンラインで学習することで、いつでもどこでも学習でき、患者教育に関する知識が向上する。また、研究成果に基づいた患者教育プログラムを学習することは、看護師は研究を活用する職業であるという看護職のアイデンティティの向上につながり、将来看護師になる目標への意欲に影響するのではないかと推測した。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護学生に患者教育プログラムをオンラインで学習してもらい、学習後に「患者教育に関する知識」「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」の効果指標を用いて学習成果を検証することである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

単群の前後比較研究とした。学習はオンラインで自主的に行い、調査については対面で実施した。

2. 研究対象者

研究対象者はA専門学校看護学科の1年次に教

員による対面での患者教育方法の学習経験のある2年生とした。対象者数設定根拠として、看護師へ実施した先行研究¹³⁾と同様に検定力分析ソフトG*powerでA priori analysis（効果量はCohen¹⁴⁾の基準である0.5とし、検出力はCohen¹⁵⁾で推奨されている0.8に設定）した。サンプルサイズは28名であった。

3. オンライン学習の内容

本オンライン学習プログラムはEASEの習得や、患者教育の知識向上を目的に筆者らが開発し、Websiteで公開されている¹⁶⁾。対象者は筆者らが開発したWebsiteのテキストをダウンロードし、講義動画を閲覧するなど、システム上の手順に沿って、患者の動機づけや理論的根拠等を学習することができる。対象者はネット環境・PCやタブレットやスマートフォンがあれば、テキストや動画を好きな時間・場所でいつでも自由に閲覧することができる。

4. データ収集方法

オンライン学習開始前、学習終了1ヶ月後の2時点に調査用紙を対面で配布し、その場で回収した。調査用紙については、研究分担者が回収後に研究筆頭者が連結不可能匿名化を行い、研究者が回収した。本オンライン学習は成人看護学実習の一環として行われるが、成績評価に関しては本研究とは関係ない評価表を使用し、それをもって評価されている。なお、研究成果の公表後など同意撤回の申し出の時期によってはデータの削除に応じられないことについても説明し、同意書への署名にて同意を得た。

5. 調査内容

1) 対象者の特性

性別、年齢、患者教育経験の有無、患者教育方法学習の有無、論文を読む頻度を使用した。

2) 患者教育に関する知識

患者教育に関する知識を確認する「患者教育に関する技法」、「患者教育に関するセルフモニタリング法」、「患者教育に関するコミュニケーション」の質問は教育内容を基に独自に作成し使用した。質問は1問ずつで合計3問であり、得点は各問正解（1点）

不正解（0点）で、3問の各得点が高いほど患者教育に関する知識が高いことを示す。

3) 研究成果活用への認識

看護研究への態度尺度¹⁷⁾を使用した。「研究が看護実践の役に立つか」など11項目の5件法であり、各得点が高いほど研究成果活用への認識が高いことを示す。

4) 将来的な仕事に向ける意欲

看護師の仕事意欲測定尺度¹⁸⁾については、2下位尺度15項目構成の尺度であるが、学生の「将来的な仕事に向ける意欲」を評価すべく、尺度開発者より許可を得て5項目のみを使用した。「より良い看護を追求していきたいと思いますか」など5項目の5件法であり、各得点が高いほど将来的な仕事に向ける意欲が高いことを示す。

6. 分析方法

対象者の特性は、記述統計を行った。効果指標の患者教育に関する知識、研究成果活用への認識、将来的な仕事に向ける意欲の変化はWilcoxonの符号順位検定を行った。解析にはSPSS ver.29を使用し、有意水準は $p<.05$ とした。

7. 倫理的配慮

本研究は水戸メディカルカレッジの倫理委員会の

承認を受けた（第210012号）。対象者には、研究目的、自由意思の尊重、プライバシーと個人情報の保護、本研究の参加状況が研究分担者である教員以外の教員に知られることはないこと、本研究の結果が学業成績評価には一切影響しないことについて、文書及び口頭で説明した。また、研究の不参加や同意の撤回等、いかなる場合でも不利益が生じないことを保証した。各尺度については開発者から文書で使用許可を得た。

IV. 結果

1. 研修対象者の特性

対象者は35名（女性32名）で、平均年齢は20.8歳であった。患者教育経験では、「なし」が91%であり、患者教育方法の学習経験では、「なし」が54%であった。また、研究論文閲覧状況では、「全く読まない」が20%、「あまり読まない」が57%と読まない傾向の対象者が8割であった（表1）。

2. 効果指標の分析（尺度ごとの介入効果の検討）

1) 患者教育に関する知識

全3項目の平均点をオンライン学習前後で比較したところ、平均点の有意な向上（ $p<.001$ ）が認められた。また、各項目の学習前後平均を比較したところ、「患者教育に関する技法」、「患者教育に関する

表1 研修対象者の特性

N = 35, () 内は %

性別	男性	3 (9)
	女性	32 (91)
平均年齢（歳）		20.8
（最小～最大）		19～37
患者教育経験	あり	3 (9)
	なし	32 (91)
患者教育方法の学習	あり	16 (46)
	なし	19 (54)
研究論文の閲覧	全く読まない	7 (20)
	あまり読まない	20 (57)
	時々読む	8 (23)
	いつも読む	0 (0)

セルフモニタリング法」の知識を確認する項目では平均点の有意な向上が認められたが、「患者教育に関するコミュニケーション」の項目に有意な向上は認められなかった（表2）。

2) 研究成果活用の重要性への認識

全11項目の平均点をオンライン学習前後で比較したところ、平均点の有意な向上 ($p<.001$) が認められた。また、各質問の学習前後平均を比較したところ5項目は平均点の有意な向上が認められたが、6項目は平均点の有意な向上は認められなかった（表2）。

3) 看護師の仕事意欲の研修前後

全5項目の平均点をオンライン学習前後で比較したところ、平均点の有意な向上 ($p<.001$) が認められた。また、各質問の学習前後平均を比較したところ3項目は平均点の有意な向上が認められたが、2項目は平均点の有意な向上は認められなかった（表

2）。

V. 考察

1. 研修対象者特性

対象者は35名であり、サンプル数28名を満たすことができた。オンライン学習前の結果では、患者教育方法の学習経験を問う質問で、過半数の学生は学習経験がないと回答している。本研究の学生は1年次に教員による対面での患者教育方法の学習経験があるにも関わらず、学習経験がないと回答しており、患者教育方法の学習が印象に残っていない可能性がある。また、教育経験では9割の学生は経験なしであったが、本研究の学生は基礎看護学実習経験のみであり、教育経験については、妥当な結果と言える。本研究の対象者は、患者教育方法の学習経験に加え患者教育経験も乏しいことから、先に述べた患者に適切な教育を提供する自信がない³⁾ 単に情

表2 研修前後の患者教育に関する知識・研究成果活用の重要性・看護師の仕事意欲における平均点と標準偏差の変化 N=35

	研修前	研修後	Wilcoxon signed-rank test	
	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差	Z値	P値
1) 患者教育に関する知識				
①患者教育に関する技法	0.60±0.49	0.97±0.17	-3.606	.001
②患者教育に関するセルフモニタリング法	0.63±0.48	0.97±0.17	-3.464	.001
③患者教育に関するコミュニケーション	0.91±0.29	1.00±0.00	-1.732	.083
上記全項目の平均	2.14±0.80	2.97±0.33	-4.053	.001
2) 研究成果活用の重要性				
①研究は日々の看護の仕事に直接結びつかない（逆転項目）	4.3±0.78	4.7±0.52	-3.125	.002
②研究の専門知識は昇進時に考慮されている	3.3±0.86	3.5±0.73	-0.802	.423
③看護職は研究に基づいた専門職になるべきである	3.2±0.95	3.8±0.81	-3.229	.001
④看護師はケアで忙しすぎて研究報告を読む暇がない（逆転項目）	2.6±0.48	2.8±0.72	-1.291	.197
⑤研究はケアを実践するうえで役立つことが多い	4.1±0.83	4.6±0.49	-3.531	.001
⑥研究の専門知識は臨床に従事する看護師にとって価値がある	4.0±0.91	4.5±0.50	-2.993	.003
⑦実践ではほとんどの看護師が研究成果を使っていない（逆転項目）	3.4±0.64	3.8±0.58	-2.830	.005
⑧研究の専門知識は昇進時に考慮されるべきではない（逆転項目）	3.5±0.81	3.8±0.77	-1.927	.054
⑨研究は看護実践ではなく看護師教育だけに関係する（逆転項目）	4.0±0.72	3.9±0.84	-0.714	.475
⑩たいいていの看護師は自分に関係する研究成果を知っている	3.0±0.48	2.9±0.41	-0.707	.480
⑪看護師は日々の看護実践に研究成果を取り入れるにはあまりにも忙しすぎる（逆転項目）	2.6±0.54	2.8±0.71	-1.342	.180
上記全項目の平均	3.5±0.38	3.6±0.51	-3.219	.001
3) 看護師の仕事意欲				
①より良い看護を追及していきたいと思いますか	4.5±0.65	4.9±0.32	-2.919	.004
②仕事上かなり困難な問題があっても、頑張ってやり遂げたいと思いますか	4.5±0.69	4.8±0.48	-3.162	.002
③担当する仕事について、さらに高度な知識や技術を身につけたいと思いますか	4.7±0.57	4.9±0.35	-1.730	.084
④現状を変化させていくことに積極的でありたいと思いますか	4.5±0.55	4.9±0.35	-3.464	.001
⑤看護の仕事は自己を成長させるものだと思いますか	4.7±0.57	4.9±0.35	-1.730	.084
上記全項目の平均	4.6±0.38	4.8±0.30	-3.951	.001

NOTE : 1)の得点可能範囲 (0~1) 2)3)の得点可能範囲 (1~5) Z値 : 負の順位に基づく

報を提供しているだけのように感じる⁶⁾といった困難を、同様に抱えていると推測される。

これらの結果から、学生が患者教育の知識を繰り返し学ぶ必要があると考える。本オンライン学習を活用することで、学生はいつでもどこでも繰り返し学ぶことができることから、これらの困難を解決できる可能性がある。

2. 患者教育に関する知識

オンライン学習前後で患者教育の知識に関する項目全体を評価した結果、平均点の有意な向上が認められた。

項目ごとに確認すると、オンライン学習前に比べて学習後の評価では、「患者教育に関する技法」、「患者教育に関するセルフモニタリング法」の知識に有意な上昇が認められた。「患者教育に関するコミュニケーション」の知識では、学習前から正答数が多かったことから、学習後に正答数の上昇が認められたが、有意差としては認められなかった。本学習ではEASEにおける患者教育に関する知識を中心に、理論的根拠として保健行動モデルや認知行動療法等を活用する重要性を学ぶことができる。また、患者教育に関する具体的な方法論として、技法、セルフモニタリング法などの知識や技術についても説明されていることから、これらの学習が患者教育に関する方法論の理解の向上に繋がったと考えられる。

Chang ら¹⁹⁾の研究では、モバイルアプリなどのオンライン教材は、看護学生にいつでもどこでも様々な教材にアクセスしやすく、従来の紙教材の学習に比べ、自分の能力に合わせて学習しやすく、学習効果が高い可能性を報告している。このことから、学生は自身の学習状況に合わせて講義動画を繰り返し閲覧するなど、システム上の手順に沿って、患者の動機づけや理論的根拠等を学習することができたと推測される。患者教育の経験が不十分であっても、より具体的な方法論を学ぶことで、技術項目などの知識を高めることができることから、本教育プログラムは方法論や技術項目の知識に関する反転学習として活用できる可能性がある。

3. 研究成果活用への認識

各質問の学習前後の平均点を見ると、「研究の専門知識は昇進時に考慮されている」などの6項目には有意な向上は認められなかった。これらの6つの質問は、学習内容に関連しない組織や業務に対する質問項目であったため、学習前後での影響がなかったと考えられる。しかし、「看護職は研究に基づいた専門職になるべきである」などの5項目に有意な向上が認められた。研究成果活用への認識の変化について、一部有意差は認められなかったが、項目全体を評価した結果、平均点の有意な向上が認められた。

「看護師はケアを実践するうえで役立つことが多い」など研究成果を活用していくことの有意な向上は、患者に効果が検証されている患者教育プログラムや活用の実践例を学ぶことで、臨床での患者教育の実践をイメージすることができ、研究成果活用への認識が向上したのではないかと考えた。また、「研究の専門知識は臨床に従事する看護師にとって価値がある」などの研究成果活用の重要性を認識することへの有意な向上は、自己意識の深化へと繋がると共に、科学的根拠を参照する看護師が少ない²⁰⁾看護実践への研究活用経験がない²¹⁾などの困難事に対して、研究を用いた看護実践が促進されると推測される。

学生が研究成果活用への認識を高めるためには、研究成果に触れるための授業展開や、研究成果の実践への活用方法をイメージできるような授業展開が重要である²²⁾。患者の行動変容への効果が検証されている患者教育プログラムをオンラインで学習することは、患者教育に関する知識を向上させるだけでなく、研究成果活用への認識も有意に向上させることから、研究成果活用を促す有効な学習方法であると言える。学生は本学習を通して、患者教育の知識と研究成果活用を結び付け、患者に根拠ある患者教育を活用することへの認識を高めることができたと考ええる。

4. 将来的な仕事に向けた意欲

各質問の学習前後の平均点を見ると、「看護の仕事は自己を成長させるものだと思いますか」などの2項目には有意な向上は認められなかったものの、

共に平均点の上昇が認められた。学習前から平均点が高かったことから、有意差が認められなかったと思われる。「より良い看護を追求していきたいと思いませんか」などの3項目にオンライン学習前後に有意な向上が認められた。つまり、将来的な仕事に向ける意欲の変化として、項目全体のオンライン学習前後の平均点を比較したところ有意な向上が認められた。

この結果は、患者の行動変容への効果が検証されている患者教育プログラムの知識を学生がオンラインにて学び、研究成果活用の重要性を認識したことを示している。

看護の視点が広がることで仕事の意欲が向上²¹⁾、研究活用の促進は仕事の満足度へ影響する²²⁾ことが言われている。臨床看護師だけでなく、学生においても、患者教育の知識や研究成果活用への認識が高まり、将来的な仕事に向ける意欲に良い影響を与えたと言えよう。

以上のことから、本オンライン学習前後の比較では、3つの学習効果があることが明らかとなった。オンライン学習は、いつでも学生の都合が良い時間に繰り返し学ぶことのできる方法である。Kyaw ら²⁵⁾による研究では、オンデマンドなどのデジタル教育は従来型学習に比べて、医学生の知識修得は同等であり、技術の修得に関しては従来型学習よりも高い可能性があると報告している。また、Chang ら¹⁹⁾による研究では、モバイルアプリなどのオンライン教材を使用した参加者の満足度が、従来の紙教材を使用した参加者よりも高いことを明らかにしている。

本研究結果のように患者教育経験が不十分であっても方法論などの技術項目の学習効果が得られることから、筆者らが開発した本オンライン患者教育プログラムを学習することは、看護基礎教育においても有効な学習方法であると言えよう。

VI. 研究の限界

本研究は、一施設での検証であり、今後は多施設での検証も行う必要がある。効果測定はオンライン学習1ヶ月後の調査のみであり、学生への「患者教育に関する知識」という短期的な効果は明らかと

なったが、長期的な効果は不明である。今後は学生の行動変容による患者教育実施後の成果や、「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」という長期的な効果について、継続して検討していく必要がある。

本研究では成人看護学実習の一環として実施したことから、学習意欲の高い対象者が多いことが、全体として良い結果をもたらした可能性も述べておく。

VII. 結論

オンラインで患者教育について学習できる EASE プログラム[®]は、学習後に看護学生の「患者教育に関する知識」「研究成果活用への認識」「将来的な仕事に向ける意欲」という3つの指標を有意に向上させることが示された。

利益相反

本研究はJSPS 科研費 JP22K10864 の助成を受けたものである。利益相反はない。

引用文献

- 1) Kornburger C, Gibson C, Sandowski S, Maletta K, Klingbeil C: Using “teach-back” to promote a safe transition from hospital to home: an evidence-based approach to improving the discharge process, *Journal of Pediatric Nursing*, 28: 282-291, 2013
- 2) Beagley L: Educating patients: understanding barriers, learning styles, and teaching techniques, *Journal of PeriAnesthesia Nursing*, 26: 331-337, 2011
- 3) Zanchetta M, Taher Y, Fredericks S, Waddell J, Fine C, Sales R: Undergraduate nursing students integrating health literacy in clinical settings, *Nurse Education Today*, 33: 1026-1033, 2013
- 4) 村山志津子, 三上ふみ子, 木村千代子, 福士裕紀, 一戸とも子: 看護学生の成人看護学実習慢性期における患者指導の実際と困難, *青森中央学院大学研究紀要*, 29: 21-34, 2018

- 5) 山本裕子, 牧野信裕, 土居洋子, 池田由紀, 田原美奈子: 卒業前看護学生の捉えた慢性病患者に対する患者教育, 大阪府立看護大学紀要, 11: 7-15, 2005
- 6) Richard E, Evans T, Williams B: Nursing students' perceptions of preparation to engage in patient education, Patient Education and Counseling, 48: 107-113, 2002
- 7) 齋藤久美子, 阿部テル子, 一戸とも子, 小倉能理子, 石岡薫, 西沢義子, 工藤せい子, 會津桂子, 安杖優子, 横田ひろみ, 小林朱実: 看護職者が患者指導にあたって感じている困難, 弘前大学大学院保健学研究科紀要, 8: 9-18, 2009
- 8) 厚生労働省: 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言, <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000620796.pdf> (検索日: 2024/6/19)
- 9) 厚生労働省: 看護基礎教育検討会報告書 2019, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (検索日: 2024/6/19)
- 10) 岡美智代, 石田貞代, 佐川美枝子, グライナー智恵子, 神崎初美, 田中尚子, 張替直美, 岩村貴美, 上澤悦子: 行動変容をうながす看護, 63-102, 医学書院, 東京, 2018
- 11) 恩幣宏美, 岡美智代, 山名栄子, 李孟蓉, 柿本なおみ, 後藤真希, 高橋純子: EASE プログラムに関する文献研究, 日本腎不全看護学会誌, 10: 80-85, 2008
- 12) Joboshi H, Oka M: Effectiveness of an educational intervention (the Encourage Autonomous Self-Enrichment Program) in patients with chronic kidney disease-A randomized controlled trial, International Journal of Nursing Studies, 67: 51-58, 2017
- 13) 松本光寛, 岡美智代, 高橋さつき: 臨床看護師を対象とした患者教育研修の効果, 日本保健医療行動科学会雑誌, 36: 65-72, 2022
- 14) Cohen J: Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences (2nd ed), Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, 1988
- 15) Cohen J: A power primer, Psychological Bulletin, 112(1): 155-159, 1992
- 16) 岡美智代, 松本光寛: EASE プログラム®, <http://183.76.74.18/ease/login/login.html> (検索日: 2024/6/19)
- 17) 岡美智代, 石田貞代, 河村誠, Chaboyer W, Creedy D: Evidence based practice に関する日本語版尺度開発と等価性の検証, 日本保健医療行動科学会誌, 20: 100-113, 2005
- 18) 佐野明美, 山口桂子: 看護師の仕事意欲測定尺度の作成, 日本看護医療学会雑誌, 7: 9-17, 2005
- 19) Chang HY, Wu HF, Chang YC, Tseng YS, Wang YC: The effects of a virtual simulation-based, mobile technology application on nursing students' learning achievement and cognitive load: Randomized controlled trial, International Journal of Nursing Studies, 120: 1-7, 2021
- 20) 二見朝子, 野口麻衣子, 山本則子: 看護師のクリティカルシンキングと科学的根拠の利用の関連, 日本看護科学会誌, 39: 261-269, 2019
- 21) 亀岡智美, 舟島なをみ, 中山登志子, 看護師の研究成果活用に関係する特性の探索 - 看護継続教育への示唆獲得に向けて -, 日本看護教育学会誌: 25, 29-40, 2015
- 22) 田畑五月, 平岡康子, 児玉真利子: 「脳卒中リハビリテーション看護認定看護師」の活動成果, 旭川赤十字医学雑誌, 27: 5-11, 2013
- 23) 野本百合子: 看護実践場面における研究成果の活用, 日本看護教育学研究, 20: 1-7, 2011
- 24) Squires EJ, Estabrooks AC, Gustavsson P, Wallin L: Individual determinants of research utilization by nurses: a systematic review update, Implementation Science, 6: 1-20, 2011
- 25) Kyaw BM, Posadzki P, Dunleavy G, Semwal M, Divakar U, Hervatis V, Tudor Car, L: Offline digital education for medical students: systematic review and meta-analysis by the digital health education collaboration, Journal of medical Internet research, 21: e13165, 2019